名なし指物語

新美南吉

青空文庫

南のほうのあたたかい町に、いつもむっつりと仕事をしている、ひとりの年とった木ぐつ屋がありました。目はぞうのように小さく、しょぼしょぼしていましたが、それにひきかえ、鼻はとてのひらが、人一ばい大きく、そのうえぶかっこうでした。

けれど、そのぶかっこうな両手が、なんという、かっこうのよい木ぐつを、つぎつぎとつくったことでありましょう。まるで魔法つかいの両手が、小さな生きものをうみだすように、つくったのでありました。

子どもたちは、いつも店先の日よけの下にしゃがんで、おじいさんの仕事を見ていました。あんまりうまくできあがるので、子どもたちは思わず、ため息をつくこともありました。

けれど、そんなに器用にうごく手でさえも、うっかりして、あやまちをおかしたことがあったのでしょうか。なぜなら、おじいさんの左手には、名なし指がありませんでした。おじいさんがまだ、木ぐつ屋の小僧だったころ、夜おそくまで、いねむりしいしい仕事をしていて、うっかりすべらせたノミの先が、きっと、その指を、とっていってしまったのでしょう。

「マタンじいさん。木ぐつ屋になるのは、むずかしいの。」

木ぐつ屋になりたいけれど、指を落とすのはおそろしいと考えていた、ひとりの子どもが、ある日、こういってたずねました。すると、マタンじいさんは、

「どうして?」

と、ききかえしました。
「おじいさんの名なし指、ノミで切っちゃったんでしょう。」
「うん、これかい。」
と、マタンじいさんは、左手をひろげて見せながらいいました。
「こいつは、ノミで落としたんじゃないよ。」
それを聞いた子どもたちは、今まで、そうだと思いこんでいたことが、まちがっていたとわかって、ふしぎな気持ちにとらわれましたが、それといっしょに、新しい好奇心がわいてきました。
「じゃ、どうしてなくしたの。」
と、さっきの子が熱心にききました。
「ふん。」
マタンじいさんは、口のあたりに、かすかなわらいをうかべながら、名なし指のない大きな手を、二度三度ひろげたり、げんこつにしたりしました。それから子どもたちのほうへ顔をむけて、
「おまえたち、手を出してごらんよ。」
と、いいました。
子どもたちは、すこし不気味になって、だれも出そうとするものがありませんでした。

「なんだい。どうもしやしない。」

そういわれて、さっきの熱心な子どもが、そっとかた手をさし出しました。おじいさんは、その小さな手を大きな手でとって、

「そうだ。わたしが名なし指をなくしたのは、わたしのこの大きな手が、この小さな手のくらいのときだったな。今では、木の根っこみたいに、ごつごつになったけれど、そのころは、この手のように美しく、やわらかだった。」

といいながら、なつかしむようにマタンじいさんは、子どもの手を見つめていました。

「わたしが名なし指を、どうしてうしなったか、そのわけを聞かせてあげようかな。」

そういってまた、ノミをにぎり、前かがみになって、木ぐつのあなをほりはじめました。

マタンじいさんも、五十年ほどいぜんには、ほっぺたの赤い、かわいい少年でした。そのころマタンは、北のほうの、古い小さな村に、たったひとりのかあさんの手で、そだてられていました。村にはリンゴの木がたくさんあって、明るい夏には白い花がさき、村にはリンゴのかおりが、いっぱいに流れました。そしてその花が、寒いころになると、珠のような美しい実になるのでした。少年のマタンが、ある日、道ばたで、一つのクルミをひろったのは、ちょうど、リンゴの実の熟れるころでした。

「なんだ、つまんない。」

マタンは、ひろったクルミをすてました。なぜなら、そのクルミは、実がはいってない、ただのからだけでした。けれど、すててはみたものの、落ちているのを見ると、またほしくなって、ふたたびひろいあげました。

〈なにかにならないかしら〉と考えながら、いろいろ、ひねくっていると、左の名なし指の頭に、ちょうどうまく、かぶさったのでした。

「ああ、ぼうしだ、ぼうしだ。」

マタンは、ひとりでおかしくて、ひとりでわらいました。そして、

名なし指、名なし指、
ぼうしかぶった名なし指、
たららん。

そんな、でたらめな歌をうたって、クルミのからのかぶさった名なし指を、まげたりのばしたりしながらやっていくと、いかめしい石のへいの下で、女の子がひとり、しょんぼりすわっていました。

「おい、ジュリーちゃん、ごらんよ。」

といって、マタンは近づいていきました。

「ほら、この指が、おじぎするよ。はい、ジュリーちゃん。こんにちは。」

女の子は、クルミのからをかぶった名なし指におじぎされて、にっこり、ほほえみました。

けれど、その大きなみどり色の目は、なみだでうるんでいました。しかし、どうしてないているのか、マタンはきこうとしませんでした。なぜならマタンは、ジュリーのおかあさんが、病気でながい間ねていること、おとうさんは酒飲みで、めったに家へ帰ってこないこと、ジュリーはパンを食べないで、水ばかりでがまんすることもあること、たまに、よっぱらったおとうさんが家へ帰ってくると、ジュリーは家からおっぽり出されることなど、よく知っていたからでした。

きょうも、たぶん、おとうさんが家へ帰ってきて、ジュリーをおっぽり出したぐらいのことでしょう。マタンは、いつものように、ジュリーをなぐさめてやりたくなりました。けれどいったい、なんでなぐさめたらいいでしょう。ビスケットでも持っていれば、たといそれが一つでも、半分ずつ食べることができるのでしょうが。

ふと、ふりあおいだマタンの目に、まっかに熟れたリンゴの実が、四つ五つ、うつりました。木は、石のへいの中にはえているのでしたが、実だけは、へいの上に見えているのでした。

マタンは、その一つをもいで、ジュリーにやろうと思いました。マタンはなぜ、そんなよそのリンゴを、もごうなどと考えたのでしょう。家へ帰りさえすれば、庭にりっぱなリンゴが、ほしいだけ実っていましたのに。マタンだって、よそのリンゴをもぐのは、わるいことだと知っていましたろうに。

けれど、ジュリーをなぐさめてやりたい気持ちがいっぱいで、そのほかのことを、考えてる

ひまがなかったのでありましょうか。

「待っといで。」

そういっておいて、マタンは、車かじやのほうへ、かけていきました。車かじやの横には、たがのはまった古い輪がたくさん、もたせかけてありました。そのうちの一つを、マタンは、ごろりごろりとまわしてきて、石のへいにもたせかけました。

白いずきんで、まるいほっぺたをつつんだジュリーは、マタンがなにをするか、だまって見ていました。マタンは、もたせた車の輪のこしきの上に、よじのぼりました。そして、リンゴのほうへ、手をのばしました。

「あ、いけないわ。」

ジュリーは、あわててさけびました。

「マタンちゃん、いけないわ。そんなことしちゃ。」

そして、マタンの右手をひっぱったのでしたが、そのときにはもう、マタンの左手は、一つのリンゴをつかんでいました。

へいの中ではさっきから、はさみを持ったお金持ちが、おじょうさんにかごを持たせて、色のよいリンゴをえらびながら、チョキンチョキンと切ってまわっていました。そして、マタンがリンゴに手をかけたとき、お金持ちはちょうど、その木の下にいたのでありました。

「マタンちゃん、いけないってば。」

ジュリーが右手をひっぱりますと、マタンはひっぱられるままに、おりてきました。けれど、どうしたことでしょう。左手をおさえて、その場にしゃがんでしまいました。顔色は、まっさおでした。

「あっ、マタン。」

ジュリーは、ものにおびえたようにするどくさけぶと、前だれで顔をおおってしまいました。

「わたしの名なし指は、そうしてなくなってしまったのさ。」

といって、おじいさんはもう、かたほうのくつをつくりあげてしまいました。子どもたちは、大きく目を見はって、聞いていました。

「クルミのからをかぶったまま、なくなってしまったのさ。」

と、ひざの上にたまった木くずを落としながら、おじいさんは、いいたしました。

「いたかったでしょう。」

と、ひとりの子どもがききました。

「いたかったさ。おまえたちなら、とびあがってなくな。」

「おかあさんにしかられやしなかった?」

と、ひとりの子どもがききました。その子は、外でけがをして帰ってくると、きっと、おかあさんにしかられるので、そんなことをきいたのでした。

「おかあさんにかい。しかられたな。よくしかられたな。けれど、しかったあとでおかあさんは、いつもわたしの手を胸におしあてて、かわいそうに、かわいそうに、だれがこんなかわいそうなことをしたのって、ないたな。」

「お金持ちのほうから、あやまってきたの。」

と、なかでいちばん年上の少年がききました。

「あやまっちゃこないさ。よその家のリンゴをとろうとしたのがわるいのだって、いってたそうだ。」

子どもたちは、だまってしまいました。

なるほど、よその家のリンゴをとろうとしたのは、わるいことにちがいありません。けれど、一つのリンゴをとろうとしたからって、指を一本切り落として、それがあたりまえだといっているのは、あまりにざんこくであるとも考えられました。

「それで、その名なし指は、どうなっちゃったんでしょう。」

木ぐつ屋になりたい子どもが、いちばん前にしゃがんでいてききました。その熱心なようすに、マタンじいさんは動かされました。

「まだ聞きたいのかい。それじゃ、聞かせてあげようかな。ちょっと、待っといで。」

もう、日が西のほうへうつっていましたので、マタンじいさんは、子どもたちの上にかぶさっていた日おおいの幕を、しぼりあげました。それから仕事台にこしをおろして、つぎのかた

ほうをほりはじめました。

マタンは小学校をおえると、木ぐつ師になりたいと思いました。ほんとうは、山の美しいスイスの国へいって、ひつじ飼いになりたいというのがのぞみでしたけれど、かなしいことに、それはあきらめねばなりませんでした。というのは、ひつじ飼いは笛を、うまくふかなきゃならないのだと、少年のマタンは思っていました。ところで、名なし指のないものに、どうしてうまく笛がふけましょう。

マタンが、木ぐつ師になりたいと思ったのにも、わけがありました。それは、ジュリーがおかあさんの木ぐつの古ばかりをはいて、歩きにくそうに、かっこかっこ歩き、すこしいそいだりすると、木ぐつがとんでいってしまうのを、かわいそうに思ったからでした。マタンはじぶんで、ジュリーの足に、ちょうどよい木ぐつを、つくってやろうと考えたのでありました。

村からなんキロも去った、ある川口にのぞんだ大きな町には、りっぱな木ぐつ師が住んでいました。少年のマタンは、その木ぐつ師のところへ、小僧奉公にいったのでありました。

「指が一本ないからには、こいつあ、いい木ぐつ師にゃなれぬかもしれん。」

親方はそう思って、マタンの左手を、じぶんの手にとって見たのでありました。けれどマタンは、おどろくほど熱心でした。仕事をしてるとき、その小さな目は、青い宝石のようにかがやいていました。かべにかかったランプのしんが、たよりなく細く、きえかかってくるころま

で、マタンは仕事場のすみで、こつこつ、仕事をしつづけました。

「マタン。もうねよう。」

と、親方のほうからいい出すのでした。

「親方、おいら、まだねむくない。」

と、マタンは顔をあげていうのでした。

「おまえの目はねむくなくても、ランプの目がねむいってさ。」

マタンが、はじめてじぶんの手ひとつで、木ぐつを一対ほりあげたのは、この町にきてから、三年後でありました。

はじめてつくりあげたもの。こんなになつかしく、こんな美しく、こんなによいものが、この世にあるでしょうか。マタンは、その木ぐつを胸にだきしめたり、両手にそろえてのっけ、その手をいっぱいのばして、首をかしげてみたり、夜はまくらもとにきちんとならべておき、それでもなお、ネズミにひかれはしないだろうかなどと、心配したのでありました。

「ジュリー」と名前をほりつけて、マタンははじめてつくったその木ぐつを、村のジュリーのところへ送ってやりました。

きっとジュリーは、なみだをこぼして喜んだことでしょう。長いお礼の手紙が、マタンのところにとどきました。

「マタンちゃんのつくったものかと思うと、足にはくのが、もったいないような気がします」

とか、「市日と祭日と、日曜日に教会にいくときしか、はかないことにします」とか、「マタンちゃんのお手々のように、大切にします」とか、そんなことが長々と書いてあって、「ありがとう、ありがとう」が、なん度もくりかえされてありました。

けれども、市日や祭日にはいてるばかりでは、木ぐつもなかなか、すりへるものではありません。それから三年もたったある日、マタンのところへとどいたジュリーの手紙には、こんなことが書いてありました。

「マタンちゃん。どうしましょう。あたしの足が、すこしずつ大きくなるのに、あの木ぐつは、大きくなってくれません。きのうもがまんして、教会まではいていきましたら、豆つぶが二つ、できてしまいました。」

「おお、かわいそうに。おいらは、ジュリーのあんよが大きくなることを、すっかりわすれていた。」

もうそのころは、ひとかどのりっぱな職人になっていたマタンは、さっそくふしのない、まさめのよい木をえらんで、新しい木ぐつをつくりはじめました。そして、それができあがったとき、親方から、ながかった奉公のおひまをいただきました。

「マタン。おまえがはじめて、わしの店へやってきたとき、わしはおまえの手を見て、指が一本かけているんでは、まあ、ろくな職人にゃなれまいと思っていたが、おまえは一生けんめいに仕事をはげんで、今じゃ、親方のわしより、よいうでになってしまった。わしはおまえを

手ばなすのが、おしくてたまらない。」

親方はそういって、たくさんの金をマタンにあたえ、わかれをおしんでくれました。

マタンは、お金と木ぐつを大切に身につけて、川のふちのにぎやかな町を去ったのでありました。それは秋のすえごろのことで、はだ寒い風が東からふき、野には人のかげさえ見えず、マタンはさびしさを感じながら、けれど、心のおく深いところには喜びをわきたたせつつ、いそいそと道をたどっていきました。いくつもいくつもの、丘を通りすぎました。どの丘の上にも、四本の手をもった風車が、はてしない秋の空の下にあって、キリキリとまわっていました。そして、風車の手によってまねきよせられるように、雲は東の地平から、つづれ綿のように流れ出してきて、いずこともなく流れ去っていきました。

一つの風車の下を通りかかると、風車のかげから、ひとりの男があらわれました。

「もしもし。」

と、その男は、マタンによびかけました。

「旅のお方のようだけど、ゆくさきはどこかね。」

マタンは、顔のつるりとしたその男を、なんて、いやな感じのやつだろうと思いましたが、正直に、これから帰っていこうとしている、じぶんの村の名をつげました。

「え、そうかね。」

と、男はさも、うれしいことを聞いたというようすでいいました。

「そいつは、さいわいだ。じつはわたしも、その村へ帰っていくところですよ。旅は道づれとかいいます。では、ごいっしょにお願いしましょう。」
「あなたは、どこの人ですか。」
「わたしは、その村生まれですよ。」
「え?」
マタンは、もういっぺん、その男を見なおしました。けれども、ちっとも、見おぼえのない男でした。するとその男は、マタンの心にわいたうたがいを、ちゃんと知ってるというように、
「生まれは生まれだが、なにしろ、三十年もまえに、あの村をとび出したっきりだから、村のことは、あんまり知りませんね。わたしの知らない人も、たくさんできたことでしょう。」
と、ぺらぺらいうのでした。そしてふたりが、だまったまま、しばらく歩いたあと、
「三十年もまえにとび出したんだから、ひょっとすると、あなたのおかあさんがわかかった時分を、知ってるかもしれませんね。おかあさんのお名前は?」
と、男はききました。
マタンは、興味がわいてきました。
「わたしのおかあさんは、ローザといいます。」
「ローザ?」
とつぶやいて、男はなにか、遠いむかしのことを思い出そうとするように、考えこみました。

そして、しばらくすると、
「あ、そうだ。思い出しました。思い出しました。ローザ、ローザ。」
と、なつかしむようにいって、マタンの亜麻色のかみが、ぼうしのふちからのぞいているのをちらっと見て、
「あなたのおかあさんは、亜麻色のかみをしていましょう。」
といいました。
「いいえ。金髪です。」
と、マタンは答えました。すると男はあわてて、
「ああ、そうそう、金髪でした。そういおうと思っていて、うっかり、まちがったことをいってしまいました。」
と、いいわけをしました。そしてこんどは、マタンの目の小さいのを見て、
「あなたのおかあさんは、小さい、かわいい目だったと思いますが。――」
といって、こんどはまちがっていないだろうというように、マタンの顔を見つめました。
「そんなことは、ありません。ぱっちりした大きな目です。」
と、マタンは答えました。
「あ、そうそう。大きな美しい目でした。そういおうと思っていて、つい、まちがったことをいってしまいました。わたしの口は、きょうはどうか、へんになっていますね。」

と男は、そんなふうに、ごまかしました。そしてさいごに、

「あなたのおかあさんは、世界にふたりといないほど、やさしい、よいおかあさんでしょう。」

といいました。

なるほど、それにちがいありませんでした。マタンにとっては、おかあさんほどやさしい人は、世界じゅうに、ひとりもありませんでしたから。

だれでも、じぶんのおかあさんをほめられれば、うれしくなるにきまっています。マタンはこうして、その男を信用してしまいました。

そこでふたりは、その日の夕方たどりついた道ばたの宿屋に、いっしょにとまることになりました。一日の旅につかれてしまったとみえて、相手の男は、床にもぐりこむとすぐに、大きないびきをかきはじめました。そこでマタンも、それに負けないつもりで、大いびきをかきはじめました。ところが、ほんとうにねむってしまったのはマタンだけで、つれの男はさいしょから、うそのいびきをかいていたのでありました。

ま夜中のころ、宿屋のまどを、中からおしあけて、こうもりのように、ひらりととびおりた人かげを、銀のフライパンのようなお月さんは、高いところから見たのでありました。その人かげは、明るいところをおそれるように、いけがき、やぶ、馬小屋、へいのかげなどの暗いところをもとめながら、ひらひらと見えかくれしていましたが、やがて、森の深いやみの中に、すいこまれるようにきえていってしまいました。

朝になってマタンは、木ぐつとお金とは、つれといっしょになくなっていることに気がつきました。世の中には、なんというひどいやつがいることでしょう。せっせと長い間はたらいて、あせとあぶらのかわりにえたとうとい金を、悪魔のように、こっそりとぬすんでいくなんて。

しかし、なくなってしまったものを、いつまでもなげいているのは、おろかなことでした。マタンはまだ、宿賃をはらってありませんでした。それは、わずかな金ではありましたが、どろぼうがすっかり、うばっていってしまった今、そのわずかな宿賃も、はらうことができませんので、マタンは一策を案じ出して、宿屋の主人からノミとツチを借り、木ぐつをつくって、金のかわりに、それではらうことにしました。

やせっぽちの主人の木ぐつ、気球のように大きな腹をしたおかみさんの木ぐつ、それから、小さいかわいい娘さんの木ぐつ、そう三足をつくってやると、主人は大喜びで、もうこれでけっこうですといいました。

ところがこの村には、木ぐつ屋がなくて、村のお百しょうさんたちが、たいへん不自由していたので、宿屋にとまっている、じょうずなわかい木ぐつ屋のうわさを聞くと、われもわれもと、木ぐつの注文をしに、やってきたのでありました。

夕方になっても、仕事はかたづきませんでした。そこでマタンは、もうひとばん、そこの宿屋にとめてもらうことになりました。夜がふけてねるときになると、マタンは宿屋の主人にいいました。

「ゆうべのへやは、わたしひとりには広すぎるから、ほかにもっと、小じんまりしたへやがあったら、うつらせてください。」

「いいですとも。ちょうどさっき、ろうかのつきあたりの、小さなへやがあきましたから、あそこへうつりなさい。」

と、主人はいって、ローソクをマタンの手にわたしました。マタンは「お休み」をいって、教えられたろうかのつきあたりのへやへ、やっていきました。

天じょうのひくい、まどの一つついたその小さなへやの中で、マタンはねるまえに、まだしばらく仕事をしました。カシの木のはめ板に、コオロギが一ぴきとまっていて、マタンに話しかけるように鳴いていました。

さていよいよ休もうと思って、マタンがテーブルの引き出しをあけ、その中へ、ノミとツチをしまおうとしたとき、マタンは引き出しの中に、ふっくらとふくれたさいふを一つ、見つけたのでありました。

思いがけないことでした。マタンは、ぼんやりしてしまいました。だれのさいふでしょう。ゆうべこのへやにとまった人が、あわててわすれていったものでしょうか。ならばマタンが、このさいふをもらってしまったら、どうなるでしょう。だまって、じぶんのふところへ入れてしまえば、それまでのことではありませんか。いや今にも、わすれていった人がひきかえして、さいふをとりにくるかも知れません。今からすぐまどをおしあけ、にげてしまえばよいのです。

ぼんやりと、さいふに目をおとしているマタンの頭の中で、たくさんの声が、いろんなことを、めまぐるしいほど、しゃべりあいました。はめ板から、ゆかに落ちたコオロギまでが、なにかいっているようでありました。

「それはわるいことだ。それはわるいことだ。」

と、コオロギはうたっていました。するとマタンの頭の中で、一つの声が、

「この世じゃ、みんながわるいことをするのだ。おまえも、ひとに金をぬすまれたのだから、こんどは、ひとの金をぬすんでやるがいいのだ。」

と、ささやきました。

「そうだっ。」

と、マタンは思いました。そこでマタンの左手が、さいふの上におずおずとのっかりました。

コオロギは、だまってしまいました。ローソクのほのおは、油のようにすんでしまいました。さっきまで、カルタでにぎわっていた台所のほうも、もう、ねしずまっていました。チョロチョロと、小川の水の流れる音だけが、この深いしずけさの中から聞こえてくる、ただ一つのものでありました。

マタンの左手が、ちょうど、引き出しの中のさいふの上におおいかぶさったとき、かれは、コツコツとたたく音を聞きました。それは、すぐやんでしまいました。マタンは、空耳（そらみみ）だったのだと思って、さいふを手にとろうとしました。すると、またしても、コツコツとたたく音が

しました。だれがどこを、たたいているのでしょう。ドアをノックしているようでもありませんし、まどを外からたたいているようにも、思えませんでした。だれかまだ、こんな夜ふけに、起きていたのでしょうか。

マタンは、じぶんの周囲を、そっと見まわしました。火のない炉、炉棚の上の古いさら、天じょう、黒いふしあな、かべにえぐられたくぼみの中のキリストの像、かべとゆかのさかいで、二つにおれているじぶんのかげぼうし、かげぼうしの横にいる鳴かないコオロギ、それからそれへと、目をうつしていきました。それらのものは、無言のうちに、マタンのしようとしていることをとがめていましたが、いったん、マタンがそのことをしてしまったら、そのことはひみつにしていてやるよと、約束しているようにも思われました。そこでマタンは、三度、さいふをとろうとしました。すると、またしても、コツコツと、たたく音が聞こえたのでありました。

「だれだろう。」

マタンは、じぶんにつぶやきました。するとマタンの耳に、答えるものがありました。

「わたしです。」

「わたし?」

マタンは、びっくりしました。

「わたし? わたしってだれだ。」

すると、その声が答えました。
「わたしは、名前がありません。わたしは生まれたときから、名前なしでした。」
「そんなへんてこな話は、ありゃしないよ。ネコだって、プスとか、ミイと、名前をもっているもの。」
と、マタンはいいました。
「ほんとうに、へんな話です。わたしには、四人のきょうだいがありました。かれらはみんな、それぞれ、名前をもっていましたが、わたしだけ、名前がありませんでした。」
と、声はいうのでした。
「きみは、ドアの外に立っているのか。さっきから、ノックしていたのはきみか。」
と、マタンがききました。
「わたしはさっきから、ノックしていました。」
と、声は答えました。
「けれど、わたしは、強くノックすることができません。四人のきょうだいたちと、いっしょにするときは、もっと強く、ノックできるのですけれど。」
「ところできみは、今じぶん、こんなところへなんの用事があってきたのだ。」

（未完）

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集　第一巻　ごんぎつね」大日本図書
　1960（昭和35）年6月20日初版発行
　1975（昭和50）年5月10日31版発行
入力：江村秀之
校正：疋田みどり
2017年1月12日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

名なし指物語

新美南吉

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/